

資 料

女性看護師とギャンブル

—パチンコを趣味とする女性看護師の現状とその思い—

佐々木 理 奈

Female Nurses and Gambling

The Present Condition of Female Nurses
who Plays Pachinko and Their Experiences

Rina Sasaki, RN

Abstract

The purpose of this study is to gain an understanding of female nurses who gamble and why they chose to play pachinko.

A questionnaire, answered by 624 female nurses and birth attendants, revealed that 19.6% of them gamble while 2.5% play pachinko.

Four female nurses who played pachinko were interviewed and they explained that they play pachinko because it is thrilling, does not require communication with others, and provides them with an opportunity to escape reality. However, at the same time, their playing pachinko made them feel guilty in regards to their family and/or work. It was also found that some of their families triggered them to start playing pachinko or encouraged them not to indulge in playing too much.

It was understood from these results that the subjects have dealt with work-related stress, including compassion fatigue brought on by the emotional labor by playing pachinko. The interviewees enjoyed pachinko simply as a pastime largely because their families accepted their pachinko playing. Their sense of guilt also motivated them to maintain a healthy social life.

キーワード：ギャンブル，パチンコ，女性看護師，感情労働，後ろめたさ

1. はじめに

近年日本でもギャンブル依存が問題になってきている。なかでも日本には日本独特の大衆娯楽としてパチンコがあり、パチンコ依存に陥る危険性も高い。2004年、日本のパチンコ人口は1,790万人と言われている。全日本遊技事業協同組合連合会（以下全日遊連）の調査ではパ

チンコ店来店者の30%が女性であるという結果が出ている。

研究者が病院に勤務していたとき、パチンコを趣味とする女性看護師が大勢いた。中には、パチンコにはまり、サラ金に手を出して自己破産にまで追い込まれ、病院を退職せざるをえなくなった看護師もいるという。看護師は何を求めてパチンコをするのか、一般女性に比べてギ

受理：2007年12月25日

ャンブル依存の危険性を知る機会の多い職業である看護師がなぜパチンコにはまるのか常々疑問に思っていた。武井(2001)は職場での怒りや無力感に対処するために「偽りの自己」を演じることの副作用のひとつとして、喫煙、飲酒、買い物、ギャンブル、異性との交際等の嗜癖があると指摘している。

女性看護師の喫煙については多くの研究が行われ、一般女性より喫煙率が高いという結果が出ている(大井田・尾崎・小椋他, 1999)(河野・三木・川上他, 2002)。また女性看護師の職業性ストレスは抑うつ度の高さに関連し、飲酒・喫煙習慣にも影響している可能性が示唆された研究もある(中尾・品川・小林他, 2003)。しかし女性看護師とギャンブルに関する研究はほとんどなく、新採用看護師を対象に、採用後3ヶ月と1年3ヶ月の時点と比較すると後者の方が平日にスポーツやギャンブルをする者が増加したというものがあるのみだった(吉田・豊増・川口, 2000)。実際にパチンコが女性看護師の生活にどれだけ入り込んでいるのかを調査した研究は見当たらない。

最近看護師の離職が大きな問題となる中で、メンタルヘルスについての関心が高まっている。しかし、ギャンブルの問題は身近でありながらあまり表に出てくることなく、その深刻さがどの程度であるかさえもわかっていないのが現状である。そこで本研究では、まず1病院を対象にアンケート調査を実施し、女性看護師とギャンブルについての現状を把握する。次に実際余暇にパチンコをしている看護師のインタビューを通して、看護師は何を求めてパチンコを選ぶのかを明らかにしていく。ギャンブルと職業的ストレスとの関係を明らかにすることにより、広く職業上の問題として考える契機となるだろう。

II. 研究方法

本研究は、アンケート調査とインタビュー調査の2つの方法を組み合わせて行った。アンケート調査は厳密な実態調査ではなく、おおまかに現状を把握するために行ったものである。

A. アンケート調査

1. 研究対象者

関東地方の一総合病院に勤務する女性看護師および助産師全員624名。

2. データ収集期間

2006年9月19日～2006年9月30日

3. データ収集方法および分析方法

全日遊連が来店者向けに行ったアンケート調査の質問票を参考に、独自の質問票を作成した。主な質問項目は、対象者の年齢と経験年数、現在ギャンブルをしているか(ギャンブルとはパチンコ、パチスロ、競馬、競輪、競艇、オートレース、宝くじを含む)、パチンコ・パチスロをしていると回答した者についてはする頻度、1回に使う金額と時間、パチンコ・パチスロをすることのメリットとデメリットであった(資料1)。

看護部長に了承を得た上で、師長会にて病棟師長に説明し、病棟師長を通してその質問票を配布し、郵送法により回収した。得られたデータの頻度や平均値を記述統計の形でまとめた。

資料1 ギャンブルに関するアンケート

Q1	あなたの年齢についてお聞きします。
Q2	あなたの看護師(助産師)としての経験年数をお書きください。
Q3	あなたは現在余暇にギャンブルをしていますか？
Q4	どんなギャンブルをしていますか？(複数回答可) 「パチンコ(パチスロ含む)」「競馬」「競輪」「競艇」「宝くじ(ナンバーズ、ロト6、サッカーくじを含む)」から選択
* Q4	はQ3で「はい」と回答した者のみ回答
Q5	どのくらいの頻度でパチンコ(パチスロ含む)をしていますか？
Q6	平均すると1回のパチンコ(パチスロ含む)に費やす時間はどのくらいですか？
Q7	パチンコ(パチスロ含む)を始めて何年になりますか？
Q8	今まで一回のパチンコ(パチスロ含む)で使った金額は最高いくらでしたか？
Q9	今まで一回のパチンコ(パチスロ含む)で獲得した景品の最高額はいくらでしたか？
Q10	パチンコ(パチスロ含む)のメリットはどんなこととお考えですか？(複数回答可) 「気分転換やストレス解消となる」「手近ですぐできる」「お金が儲かる」「暇つぶしになる」「人間関係の潤滑油になる」から選択

Q11	パチンコ(パチスロ含む)のデメリットはどんなことだとお考えですか？(複数回答可) 「お金がかかる」「時間を無駄に使っていると思う」「健康に悪い」「周囲の目が気になる」「やめられなくなる」「負けると逆にストレスになる」から選択
Q12	パチンコ(パチスロ含む)について感じていること、思っていることがあれば何でもお書きください。

* Q5～Q12はQ4でパチンコ(パチスロ含む)を選択した者のみ回答

B. インタビュー調査

1. 研究参加者

現在パチンコを月1回以上している、または過去にパチンコを月1回以上した経験をもつ女性看護師4名。アンケート調査でインタビュー参加者を募集したが、協力者がいなかったため、研究者の知人に研究の趣旨を説明し、了承を得た。

表1 インタビュー参加者の年齢と職歴

参加者	年齢	勤務年数	主な勤務病棟
Aさん	20代後半	7年	精神科, 手術室
Bさん	30代後半	14年	小児科その他混合, 内科, 外来
Cさん	20代後半	4年	小児科その他混合
Dさん	30代後半	15年	内科, 救急, ICU

2. データ収集期間

2006年9月～2007年1月

3. データ収集方法および分析方法

1名につき1回ずつ、平均68分の半構成的面接法によるインタビューを行った。場所は研究室、参加者の勤務する病院もしくは自宅で行った。参加者の希望により喫茶店で行うこともあった。

主な質問内容は、パチンコを始めたきっかけ、パチンコをすることのメリット、パチンコをすることのデメリットについてであった。インタビューは承諾を得た上で録音し、逐語録を作成した。逐語録を何度も読み返し、4名に共通するテーマを抽出してカテゴリー化し、それぞれの語りを比較していく方法で分析を行った。分析結果については研究指導者のスーパーバイズを受け妥当性の確保に努めた。

C. 倫理的配慮

アンケート調査については回答は自由意志によるものであり、回答しなくても不利益は被らないことを明記し、無記名とした。また質問票は師長を通して配布したが、師長からの強制力が働かないように、事前に師長に文書と口頭で説明を行い、回収は個人が特定されないように郵送法で行った。インタビュー参加者には途中いつでも中断ができること、答えたくない質問に対しては断れることを文書と口頭で説明し、同意を得た上で行った。得られたデータは個人が特定できないように処理し、研究目的以外には使用しないことを保証した。本研究は日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った。(承認番号:2006-29)

III. 結 果

A. アンケート調査

1. 回答者の属性

対象者624名中、276名から回答を得た。(回収率44.2%)

年齢は、20代が37.7%と最も多く、次いで30代が32.6%であった。50代は14.5%、40代は12.7%、60歳以上は0.7%であった。勤務年数は、20年以上が25.4%と最多で、次いで1～5年未満が25.0%、5～10年未満が17.0%、10～15年未満が16.7%、15～20年未満が9.4%であった。

2. ギャンブルをする女性看護師の現状

「あなたは現在ギャンブルをしていますか?」という問いに対して、222名(80.4%)が「ギャンブルをしていない」と回答した。日頃宝くじのみ購入していると回答した者は43名(15.6%)、それ以外のギャンブルをしていると回答した者は11名(4.0%)であった。中でもパチンコ(パチスロも含む)をしていると回答した者は7名(2.5%)であった。そのうち4名がパチンコのみ、3名がその他のギャンブルもしていると回答した。

年齢については、パチンコをしていると答えた7名中6名が30代、1名が40代であった。勤務年数については3名が10～15年未満、2名が

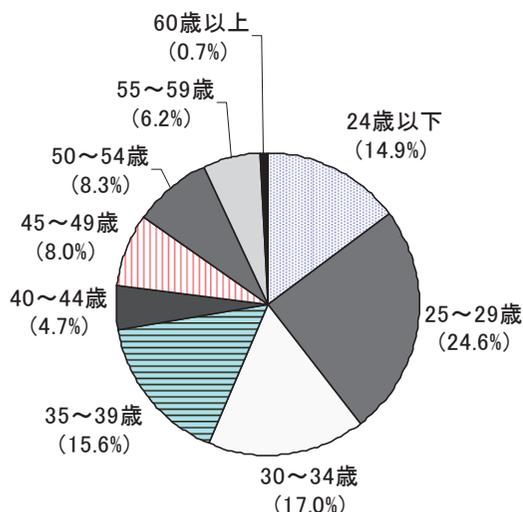


図1 対象者の年齢 (N=276)

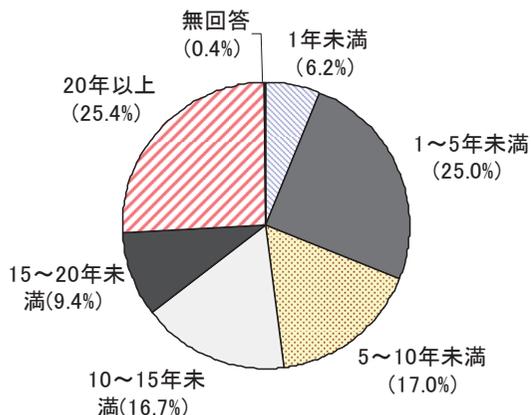


図2 対象者の経験年数 (N=276)

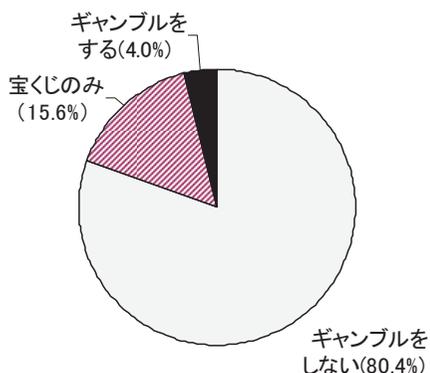


図3 ギャンブルをする対象者の割合 (N=276)

15～20年未満, 1名が1～5年未満, 1名が20年以上であった。パチンコをする頻度については4名が月に2～3回, 3名が月に1回程度であった。パチンコをすることのメリットについては、「気分転換・ストレス解消」「儲かる」ことを挙げている者が多かった(それぞれ3名ずつ)。デメリットについては6名が「お金がかかる」を挙げ、「時間の無駄だと思う」「負けるとストレスになる」も3名ずつ回答した。

自由記載では、「集中し、現実を逃避できる」「いつも人の為に使っている時間を自分のためにだけに費やせる快感がある」「学習が不要で、ワクワク感や大当たりするかもという期待が簡単に手に入る」という意見がある一方で、「付き合いの面もあるので疲れる」「タバコも増えるし健康的ではない」「デメリットは音と煙害」という意見もあった。

ギャンブルをしない看護師からは「興味深いテーマだ」という意見や「パチンコと看護師は関係があるのか。イメージが悪くなる」といった意見があった。

B. インタビューで語られたこと

インタビューで得られたデータを分析した結果、語られた内容は、1. パチンコを始めたきっかけと現状, 2. パチンコはどのような体験なのか, 3. パチンコと家族の3つのテーマに分類された。それぞれについて述べる。

1. パチンコを始めたきっかけと現状

このテーマはく身近でパチンコをする人の存在<>パチンコをする頻度>の2つのサブカテゴリーに分類された。

a. 身近でパチンコをする人の存在

参加者4名全員の身近にパチンコをする人がいた。それは親であったり(Aさん), 学生時代の友人(Bさん, Dさん)あるいは職場の先輩であったりした(Cさん)。強い興味をはじめからあったわけではなく, その人に誘われたり, ついていったりしたことがパチンコを始めたきっかけであった。

参加者4名中3名がパチンコをする看護師が身近にいたと語った。Bさんは現在外来勤務だ

が、以前働いていた内科病棟には看護師も医師もパチンコをする人が大勢いたという。Aさんの職場にもパチンコをする看護師がおり、Cさんは職場の先輩看護師に誘われてパチンコを始めた。看護師の身近にパチンコが存在しているのである。

b. パチンコをする頻度

現在参加者がパチンコをする頻度は、3ヶ月に1回から週に4回までと参加者それぞれであった。BさんとDさんは既婚で子どももいるが、独身の頃に比べるとパチンコをする頻度は低くなったという。今でもBさんのパチンコをする頻度は、2、3ヶ月に1回から週1～2回までと不定期である。その理由を、Bさんは「気持ちが落ち着いていたりとか育児が落ち着いていると、行きたい気分にならないので。なので不定期なんじゃないかな」と語った。またBさんは以前うつ病を患っていたことがあるが、その時期には毎日パチンコ屋に通い、金銭的にも「気にせず使っていた」という。

Aさんもストレスがなければパチンコには行かないと語った。現在は精神科病棟に勤務しているが、以前は手術室で働いていた。そのときは1ヶ月に1～2回はパチンコをしており、「夜勤なかったから給料減ったんです。でもその間ある程度生計を立ててた。勝ってたんです」という。現在は「自分の中でもやるのが本当でない最終手段」としてパチンコを位置づけており、3ヶ月に1回程度行くくらいだという。

小児科その他の混合病棟に勤務するCさんはスロットを「副業って感じ」でしており、パチンコは「たまにやるぐらい」である。パチンコとスロットをあわせると、週に4回ほどしている。以前パチンコだけを「趣味として」していた時期には「もしかしたらお金が増えるかも」と思い、「もう暇があれば行ってた感じ」だったと語った。

2. パチンコとはどのような体験なのか

これには<勝つ喜びと負けるスリル><「からっぽ」な感じ><コミュニケーションがいない><人にサービスしなくてもよい><パチンコをする後ろめたさ>の5つのサブカテゴリーが

見出せた。

a. 勝つ喜びと負けるスリル

「お金を賭けてるから、嬉しさの度合いとか楽しさの度合いとか種類が違う」とAさんが言うように参加者は皆ギャンブルとしての喜びとスリルを感じていた。さらに「リーチになったときとかドキドキするじゃない。そういう感覚って良かったりする」(Dさん)というように、ゲームとしてのおもしろさや非日常的な興奮もパチンコをするにつながっていた。

b. 「からっぽ」な感じ

勝ち負け以外のパチンコをする理由として参加者が共通して述べたことは、パチンコに集中することで嫌なことを忘れられるということであった。参加者は皆パチンコをしている間は、パチンコに「のめりこんで」おり、「何も考えないで絵が揃うことに集中」していた。頭の中は「からっぽな感じ」になり、パチンコ屋は「現実逃避ができる空間」となっていた。

頭にきたこととかあると、打つ前は「なんか今日すごい嫌な感じだった。むかつく。パチれないかな」って思うけど、(パチンコをしているうちに)忘れませえ、あんまり考えない(Dさん)

しかし、一方でこのようにパチンコをして現実逃避をしていても「解決はしない」と自覚している参加者もいた。どの参加者もパチンコはギャンブルであると理解しつつも、「儲けよう」や「勝とう」という気持ちではなく、あくまでもストレス解消であり、遊びの一種と認識していた。

c. コミュニケーションがいない

「色々ある趣味の中でなぜパチンコを選ぶのか」という問いかけに対して、参加者はパチンコにはコミュニケーションが不要であることを語った。

パチンコをチョイスするのは、海外に行ったりって買い物に行ったりってコミュニケーションをとらなきゃならないけど、パチンコはとらなくていいからね。機械だからね。(Bさん)

職場ではスタッフや患者とのコミュニケーションが必ずあり、参加者はそこからの一時的な解放を望んでいた。そのため機械相手の、コミュニケーションをとる必要のないパチンコをすることで「他の誰にも邪魔されない自分だけの時間をチョイスする」のだと述べていた。また元来「人と接するのもあんまり好きじゃない」性格であるというCさんは「人と話さなくてもいい、それでもって楽しめる」ものがパチンコだったと語った。Aさんは、その時々ストレスの内容の違いによって、友人とのコミュニケーションを必要とするのかそうでないのかが決まると話した。

例えば自分が勉強できてなかったから、上の人に怒られたとか。そういうので友達とかに言うのも恥ずかしいって。プライド高いから。一人で消化しなきゃいけないから、だから友達と会うよりは一人でいる方がいいと思って。(Aさん)

しかし、自宅で一人の時間を過ごすことは「あまりにも静か過ぎて、ちょっと寂しく」なったり「落ち込んで」いってしまったりする参加者もいた。大勢の人間がいるにもかかわらず、コミュニケーションが不要なパチンコ屋独特の空間が、参加者にとっては居心地の良いものとなっていた。

なかにはDさんのように行きつけのパチンコ屋独自の人間関係を持っている参加者もいた。そこではお互いのプライベートなことは語らずに、パチンコを話題の中心とした人間関係ができていた。そこにある馴染みの人間関係は、話したくないときにはうるさく思うことはあるが、大抵は「(看護師同士でする話とは)違う話できて普段の自分を忘れられる」という。

d. 人にサービスしなくてもよい

参加者は、仕事上で怒りや嫌悪などの感情を抱いても、その感情を抑圧しなければならないと感じ、そのことをかなりのストレスと感じていることをパチンコをする理由として語った。Dさんは「仕事に行ったらずっと喋ってなくちゃいけないし、嫌な患者さんとかでも自分の感

情で言っちゃいけないし」と職場でのストレスを語った。またBさんはなぜパチンコなのかを振り返り次のように語った。

多職種がいて必ず接触があるような環境で、8時間そこに固定されて、そして笑顔を振りまいて。嫌な患者にもいい患者さんにもそれなりのサービスを与えているだけに、一人になったときに一人の時間を楽しむことがパチンコだったのかな。

参加者はそのストレスから逃れるために「怒っても機械にあたってればいいから、人にあたらなくていい」パチンコをするというのである。職場では他者のために感情を抑圧し、他者のために使っている時間を、コミュニケーションを捨てることで感情を抑圧することもなく、自分のためだけに使えるということがパチンコの最大のメリットのようであった。

e. パチンコをする後ろめたさ

パチンコをすることで、一時的にストレスや否定的感情を忘れ、回避することができても、参加者はどこか後ろめたさを感じていた。

参加者全員がパチンコをすることのデメリットとして「お金がなくなること」を挙げたが、それに伴い強い自己嫌悪や後悔が生じていた。Aさんは、負けているときには「なんでここまでのめりこんでいるんだろう」と感じ、勝っているときには「いつまで続いちゃうんだろう」と不安を持つのだと語った。しかしお金がなくなっても、借金をすることなく「生活は生活でまじめに考えて」いると考えることで、パチンコをすることについての後ろめたさを打ち消しているようであった。

また全員がパチンコは金儲けが目的ではなく、遊びの一種であると捉えていた。Bさんは「気分転換なのか、金儲けなのか、目的を考えてやれば怖いことはないと思う」と話すなど、パチンコを否定的に捉えたくないという意味が感じられた。しかし今ではそのような認識を持っているBさんもうつ病を患っていた時期には「歯止めがきかなくなり」止められなくなったという。うつ病が軽快するとともにそのような状態

から脱したBさんだが、あの体験によってパチンコの恐ろしさに気づいたと振り返った。Dさんも「負けても負けても、また行きたいって思っちゃう」「金銭感覚がなくなる」というパチンコの怖さを認識しつつも、「借金してまでっていうのは思わない」と自分の中で限界を設定しているようだった。パチンコの嗜癖化する危険性を知りながらも自分でコントロールできる限り、気分転換やストレス解消になると思っていた。

「パチンコをしていると周りの人に言っているか」という問いかけに対して、Dさんは「友達の中でもそれ嫌いだっていう人が多いから、そういう子には言わない。だから半分は悪いものだと思うみたい、自分の中で」と答えた。また競馬や競輪などの他のギャンブルには「暗いイメージ、黒のイメージ」があり、パチンコは「今コマースシャルでもやり始めてるから、悪いものっていう気がしない」という。Aさんも「パチンコ屋はどこにでもあり」「CMもあれだけやっている」ことが、他のギャンブルとの違いだととらえていた。参加者はパチンコを他のギャンブルと区別することで、ギャンブルに手を出しているという後ろめたさを軽くしているようであった。

3. パチンコと家族

パチンコについての話の中には、しばしば家族が登場した。〈パチンコをするきっかけとしての家族〉と〈パチンコにはまりすぎないよう支える家族〉である。

a. パチンコをするきっかけとしての家族

Aさんがパチンコを始めたのは、先に述べたようにパチンコをする両親とともにいったことがきっかけであった。Dさんもおばがパチンコをしており「小学校の頃から(パチンコの存在を)知ってた」という。両親もパチンコをすることに対して厳しく反対することはないという。身近にパチンコをする人がいることにより、パチンコがどのようなものか知る機会があり、パチンコに対するマイナスイメージがないことがパチンコを選びやすくしていた。

一方、Bさんの両親はとて厳しく、ギャン

ブルはもちろん喫煙も飲酒も禁止だったという。18歳で親元を離れてから色々なことを知り、その反動もあったのではないかとBさんは自身を振り返った。

b. パチンコにはまりすぎないよう支える家族

Dさんは、現在家族にパチンコをすることを伝えて出かけている。小学生の二人の子どもが遊びに行っている間にパチンコに行き、子どもが帰宅する時間にはDさんも帰宅するという。金銭的にも「毎日来れる環境じゃないから、1回使っちゃったら3日後くらいに、今度は冷静に」と考えている。その結果「負い目的なもの、家族をおいてまでギャンブルやりに行ってるみたいなのは少ないかな」と気持ちを語った。

Bさんは夫や子どもの理解を得て、帰宅する時間を約束してパチンコに行くという。そうすると「子どもたちも納得して、主人も納得して出してくれる」という。子どもたちも「帰ってくる時顔が違う」と言い、ストレス解消のひとつとしてパチンコを認めてくれているとBさんは感じていた。2名とも、パチンコは「麻薬的」だと認識しつつも、ストレス解消のために金銭や時間をやりくりしながら計画的にパチンコをしていた。麻薬のようなパチンコにはまりこまないために、家族が防波堤となっているのである。

IV. 考 察

A. 看護という職業とパチンコ

なぜギャンブルをするのかという理由には様々なものがある。谷岡(1996)はパチンコの内的動機を暇つぶしやストレス解消、現実逃避などの9種類に分類した。本研究のインタビュー調査参加者もパチンコをする理由としてストレス解消や現実逃避を挙げたが、それは看護師という職業から生じるものが大きな割合を占めていた。職場では患者やスタッフに気を遣って、サービスしなくてはならないが、パチンコは機械相手であり、コミュニケーションを必要せず、感情を抑圧する必要もない。しかし、パチンコをしているときは大勢の人間がその場にいながらも、自分だけの時間を過ごすことがで

きるとインタビュー調査参加者は口を揃えて語った。つまり、看護が患者相手の感情労働そのものであることがパチンコのような息抜きを必要としているのである。

感情労働とは「職務上、自分の感情を誘発したり抑圧したりしながら、相手の中に適切な精神状態を作り出すために、自分の外見を維持しなければならない」(Hochschild, 1983/2000, p.7)ものと定義されている。本研究の参加者も自分が患者や同僚に対して怒りなどを感じたとしてもその感情を抑圧し、相手に居心地の良さを感じてもらおうと日頃、感情をコントロールしているという。しかし、感情労働にはコストがかかる。燃え尽きたり、演技している自分を責めたりする可能性がある(Hochschild, 1983/2000, p.214)。また、傷ついた人々をケアすることで、看護師の中に共感疲労が生じ、無力感や抑うつを経験することがある(Figley, 1995/2003)。そのため離職する看護師も多いが、看護師を続けていくためには、どうにか本来の自分と看護師である自分とを切り離し、職場でのストレスを軽減させることが必要となってくる。看護とはおよそかけ離れているパチンコだが、それゆえに疲弊した心を癒し、自分だけの時間を取り戻すことによって、日常に戻れるのかもしれない。

また、「頭がからっぽになる」「現実逃避」と参加者が語ったのは、一種の「解離」の防衛機制とみることができる。van der Kolk & MacFarlane (1996/2001)は「回避は、例えばその体験を思い出させるような刺激を避けたり、苦痛となるような情緒状態を麻痺させることを目的に薬物やアルコールを摂取したり、解離を用いて不快な経験を自覚的な意識から遠ざけておくことなど」(p. 17)としている。大音響の中で長時間ボーとしているのも、普段病棟でアラームや様々な物音を敏感に聞き分ける過覚醒状態にある神経を鎮め、鈍らせる効果があるのだろう。手術室勤務のときにパチンコをする回数が増え、別の部署に異動になってからはそれほどなくなった参加者がいたが、このことから職業上のストレスとパチンコは明らかに関連があることがわかる。

にもかかわらず最近ではテレビコマーシャルなどで、パチンコのイメージが明るいものに変わってきているとはいえ、看護師にはいまだに「白衣の天使」のイメージがあり、パチンコをすることには、後ろめたさや恥の感覚がつきまとうのではないだろうか。本研究のアンケート調査で、ギャンブルをしない看護師から「イメージが悪くなる」という意見があったように、看護師自身の中にも看護師がパチンコをすることをあってはならないことと考える傾向が認められた。アンケート調査では、パチンコをしていると回答した者は2.5%にすぎないが、インタビュー参加者の周囲にはパチンコをする看護師が多数存在していた。おそらく、パチンコをする者同士はそのことをオープンにできるが、それ以外にはパチンコをしていることを公表しにくいかもしれない。

B. 歯止めとなる家族と職業

母親たちがパチンコをしている間に、置き去りにされて死亡した子どもたちの事件が起こるたびに「母親なのに」という非難が巻き起こる。現代では、男らしさ、女らしさについての考え方が変化してきており、全日遊連の調査では来店者の3分の1が女性であるという結果が出ている。しかし、それでもなお「女性はギャンブルをするべきではない」という考えが社会にはある。そのような社会の中でギャンブルをする女性は常に男性以上に後ろめたさを抱えているのではないだろうか。特に主婦の場合は家庭をないがしろにしてパチンコをしているという感覚を持ちやすく、時間的にも独身時代よりもパチンコをする頻度は減るようである。しかし本研究で語られたのは、夫や子どもに了解を得てパチンコをすることで、後ろめたさが少しやわらぐようだということであった。斉藤(1989)は依存の基礎になっているのは共依存という嗜癖的人間関係である述べている。何かに依存する人とそれを止めさせようと躍起になる家族という構図が、ますます依存を強めていく。しかし本研究の参加者はパチンコをしていることを家族に話すことができ、非難されずに認められていることにより、家族がストレスとはならず

に防波堤として機能しているようだった。

田辺(2002)は、ギャンブル依存症と単なるレジャーとの違いは自分で自分のギャンブルを制御できないこと、やりたい気持ちを抑えられないことに表れていると述べている。本研究の参加者は、今のところパチンコを趣味として適度に楽しんでいますが、それはパチンコを金儲けの手段として捉えていないことが関係しているのではないだろうか。金儲けが目的ではなく遊びのひとつと割り切っているため、負けた金額を取り戻そうと躍起になるのではなく、趣味としてパチンコをうまく使えているようである。また、参加者にとっては後ろめたい気持ちがかえって家族や職業を思い出させ、結果的に職業生活や社会生活を継続させようとする原動力になっているようだった。しかし、今後職業的ストレスの増加や家庭環境の変化などにより、嗜癖化する可能性もある。このことについては今後、止められなくなる人と適度に楽しむ程度でおさまる人との違いを明らかにする研究が必要だろう。

V. おわりに

本研究からわかったことは、看護師は職業的なストレスに対処する方法としてパチンコを選ぶことがあるが、女性であり看護師であるからこそ後ろめたさや恥の感覚を持ちやすいということである。そのためパチンコをすることをオープンにすることには抵抗があり、なぜパチンコに惹かれるのかを言葉にする機会もほとんどないということである。今回のインタビュー調査は看護という職業を振り返る機会となった。しかし本研究はアンケート調査については1施設のみでの調査であり、今後対象者数を増やして実態を把握する必要がある。またインタビュー調査については今回は女性に限定したが、男性看護師についても同様の研究を重ねる必要がある。

謝 辞

本研究を行うにあたり、快く研究に協力してくださいました皆様に心より感謝申し上げます。本研究は平成18年度日本赤十字看護大学課題研究費の助成を得て実施いたしました。

文 献

- Figley, C.R. (1995/2003). 共感疲労. B.H. Stamm (ed.)／小西聖子・金田ユリ子訳. 二次的外傷性ストレス (pp.3-28). 誠信書房.
- Hochschild, A.R. (1983)／石川准・室伏亜希訳 (2000). 管理される心. 世界思想社.
- van der Kolk, B.A., McFarlane, A.C. (1996/2001). トラウマというブラックホール. B.A. van der Kolk, A.C. McFarlane & L. Weisaeth (eds.)／西澤哲訳. トラウマティック・ストレス (pp.3-33). 誠信書房.
- 河野由理・三木明子・川上憲人・堤明純 (2002). 病院看護婦における職業性ストレスと喫煙習慣に関する研究. 日本公衆衛生雑誌, 49(2), 126-131.
- 中尾久子・小林敏生・品川汐夫 (2003). 看護職における職業性ストレス, 生活習慣と精神的な健康度の関連性. 山口県立大学看護学部紀要, 7, 25-31.
- 大井田隆・尾崎米厚・小椋正之他 (1999). わが国における看護婦の喫煙行動. 厚生指標, 46(6), 18-22.
- 齊藤学 (1986). 家族依存症. 誠信書房.
- 武井麻子 (2001). 感情と看護. 医学書院.
- 田辺等 (2002). ギャンブル依存症. 日本放送出版協会.
- 谷岡一郎 (1996). ギャンブルフィーヴァー. 中央公論社.
- 吉田典子・豊増功次・川口貞親 (2000). 新採用看護婦における精神的ストレス状況の経年変化と余暇活動の関連. 産業衛生学雑誌, 42, 547.